

夫が必要である。

76) 脳底動脈狭窄症に対して stent 留置による血管拡張術を施行した1例

内山 尚之・木多 真也(金沢大学)
 渡邊 卓也・山下 純宏(脳神経外科)
 眞田順一郎・松井 修(同 放射線科)

【症例】62才, 男性。【既往歴・現病歴】10年前に左内頸動脈閉塞症のため左眼視力低下と右片麻痺をきたしたが, 左 STA-MCA 吻合術により, 麻痺は回復し復職した。平成12年1月, 両眼の見えづらさと身体動揺感を訴え再入院した。MRI では両側後頭葉と中脳に多発性の小梗塞がみられ, PET study では両側 PCA と左 MCA 領域が misery perfusion であった。脳血管造影検査では, 脳底動脈に高度の狭窄をみた。低分子デキストラン, オザゲレル, チクロピジンによる保存的加療を行ったが, 視野障害は増悪し, さらに一過性の右半身脱力も出現するようになったため, 3月2日, 脳底動脈狭窄病変に対して, 2.5×15mm の PTA バルーンで前拡張後, GFX 3.0×8 mm stent を留置した。術後, 視力視野障害は改善し, 一過性の脱力発作も消失した。【結論】進行性の脳虚血症状を呈する脳底動脈狭窄症に対して, stent 留置による血管拡張術は有用な治療手段である。

77) Transradial approach による脳血管撮影の検討

熊谷 孝・武田 憲夫
 井上 明・井渕 安雄
 菅井 努・武田健一郎(山形県立中央病院)
 土屋 尚人(脳神経外科)
 星 守(同 放射線部)

【目的】Transradial approach による脳血管撮影(TRA)の有用性を検討した。

【方法】H11年6月からH12年3月までに TRA を施行した53例(男26, 女27, 平均60.4歳, 当該期間血管撮影の24.5%)を対象に以下の項目を検討した。適応症例は術後症例, transfemoral approach (TFA) 不能例とし, Allen test 陰性例, 閉塞性血管障害の初回撮影は適応外とした。【結果】①成功率: 53例中50例(94.3%)で目標血管が撮影可能で, rt CAG, lt CAG, rt VAG, lt VAG の成功率は100%, 100%, 100%,

90.9%だった。Selective ICAG の成功率は84%に留まった。Lt VAG の3例は左 TRA で行った。TFA 不能例は全例 TRA で撮影可能だった。②所要時間: TRA, TFA 間で差はなかった。③患者の負担: TFA との比較を33症例から聴取したところ全例から TRA の負担が遥かに軽いとの回答を得た。④合併症: 重篤な合併症は認めなかった。【結論】TRA は確実性が高く患者の負担も合併症も少ない有用な方法であるが, 基礎疾患, 目的に応じて症例を適切に選択して行う必要がある。

78) 外科手術と血管内治療を行った症例の検討

菅原 孝行・関 博文(岩手県立中央病院)
 朴 永俊・遠藤 英彦(脳神経センター脳神経外科)

【目的】外科手術(ST)と血管内治療(IVR)を行った症例を検討した。【対象】97年3月以降, ST と IVR を行った症例13例を対象とした。内訳は, A) 同一部位への治療では, 一方が不成功に終わり, 他方で治療した症例5例(IVR-ST3例, ST-IVR2例, いずれも動脈瘤)。B) 多発動脈瘤の一つを IVR で, 他方を ST で行った3症例。C) 動脈瘤に合併した他疾患を別の治療をした2症例。D) 破裂脳動脈瘤を clip し, 脳血管攣縮に対して IVR を行った3症例, である。【結果】A) IVR-ST3症例中2例で clip 成功したが, 1例では clip ができなかった。ST-IVR2例は成功した。B) 脳底動脈瘤, 内頸動脈分岐部動脈瘤を IVR でおこない, Willis 輪前半部の動脈瘤を ST でおこない, いずれも excellent であった。C) 脳動静脈奇形を ST で, 合併した動脈瘤を IVR で治療。破裂脳底動脈瘤を IVR で治療し, 合併する内頸動脈高度狭窄部は後日血栓内膜剥離術をおこなった。いずれも良好な結果が得られた。D) 血管拡張あるいは塩酸パパペリンの選択的動注をおこなったが, 広範囲に梗塞巣をきたした。【結論】脳神経疾患の治療には ST, IVR の利点を生かし両者の視点から治療適応を決定できれば, 治療の可能性が広がると考えられた。